

年寄向きのヒマラヤ ジョムソン街道・タサンビレッジ滞在記

鴨6 鎌田克則

「ヒマラヤは遠くなりにはけり」と言うのが今までの実感だった。秋の初め、東京の友人（よく一緒に海外に行く友人の一人）より「どうしてももう一度ヒマラヤに行きたい。行先はジョムソン街道のタサンビレッジ、それとポカラの好きなホテルにも泊まりたい。」と連絡有り。ジョムソンと聞けば、飛行の不安定さの印象が拭えず、聞くと最近はかなり安定して飛ぶとの由。

秋は色々と予定が詰まっているが、無理をすれば何とかなる。「行きたいところには行く。行けるうちに行く。後は何とでもなる」という鎌田原則に従って参加決定。大阪から私と松下昌弘さん、東京からは言いだしっぺの石原玲子さん、浅田ミチさん、男性2名、女性2名の小パーティーとなる。

10月28日（火）深夜関空発、バンコック経由、カトマンズへ飛ぶ。東京勢もほぼ同時刻羽田発、バンコックにて20分差で合流、何とそれから5時間待ち。後で聞けば、今でも香港経由、韓国経由等が有るが、同じような時間待ち。タイ航空が一番安定しているらしい。カトマンズ直行便が無いと、最近のネパール観光は、日本人は観光客の10%程度。圧倒的に多いのが中国50~60%、韓国10~20%、ヨーロッパ人が10~15%と言う。どこも様変わりなのだ。

さてその後は3時間ほどのフライトで、昼頃にカトマンズ着。そこでガイドのデニッシュさんと出会い、3時頃ポカラに飛ぶ。この辺りは段取りがよくなったものだ。

そしてポカラで泊まったのが、フィッシュテールホテル。大きな湖の真ん中にあり、船で渡る。なかなかの風情あり、ロジ風でセンスも一流。



フィッシュテールホテル

フロント横の写真を見れば、日本の皇太子、チャールズ王子、ジミーカーター等々が写っている。世界のお歴々が来ているのだ。メンバーが来たいと言う筈。

花のきれいなロジ風の部屋に陣取る。豪華ではないが機能充分、雰囲気が良い。

夕食前、連絡が入ってヒマラヤ観光(株)社長 宮原巍さん（ネパール在住。数々の遠征隊に参加され、ネパール政府の要人）が訪ねて来られる。我々がヒマラヤ観光(株)の上得意？と手配したらしい。

1～2度会合でお会いしているが、1934年生まれ（80歳）とはとても見えない。今ポカラで一番の展望台、サランコットに仮称アンナプルナ・ビュー名で80室からのホテルを建てている。2016年春には完成するから、是非来てほしいとの事。思わず「そのエネルギーは何処から出て来るのですか」と聞いたら「惰性ですねえ」と言うお答えなのだ。いやはや惰性でホテルを建てるとは、精力的な人である。

寝る前、渡されたダッフルバッグに当面の荷物を入れ、トランク他下界荷物はホテル預け。

10月29日（木）朝のホテルの周辺は静かで、霧たつ湖面の上には、アンナプルナらしき白く輝く峰々が惜しげもなく見える。さすが憎い程の風景である。

さて朝からガイドの迎えで又空港へ。但し空港片隅と言うか、うらぶれた待合室。カトマンズ、ポカラとだんだん空港レベルが落ちる。荷物と人間が大声への中で交差するうちに飛行手続き。窓の向こうはルクラに飛んだ飛行機と同型機が2機程エンジン音を上げている。片や飛行場の先には明らかにヒマラヤと思える山々が光っている。

その内に即されて飛行機へ。相変わらずのボロ飛行機。いつも耳栓の綿とアメが配られる30人乗り位の小型機。機内は狭く周りは擦り切れている。何とか翼より前の座席を確保。カメラを出して待機。アンナプルナかマチャプチャレが見える筈。そんな事お構いなしに凄いエンジン音と共に飛び立つ。

あちこちの窓に白い巨大な峰々が見え、コクピットも丸見え、下は段々畑の山々が見える。山の上を飛んでいる実感そのもの。あれこれ2～30分飛んだらうか。谷底の一直線の飛行場へ。

以前のルクラやシャンボチエの飛行場より良く出来ている。何しろ滑走路が平坦で舗装されているのだ。

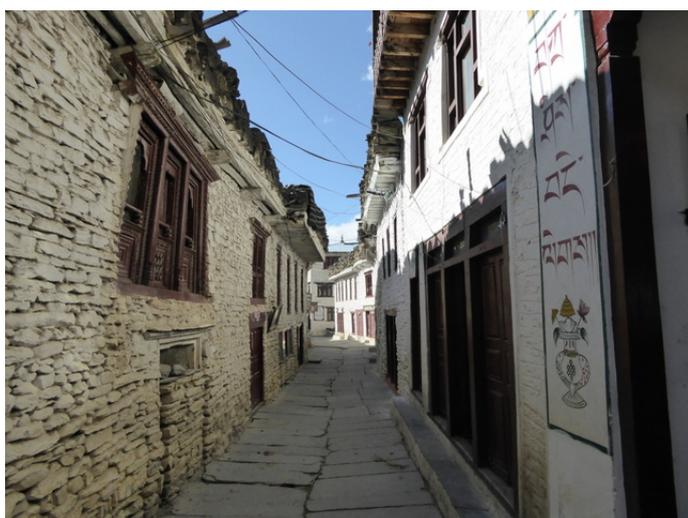
それより驚きはアンナプルナを通り過ぎ、その西北端ニルギリ峰（7,061m）と東のダウラギリ峰（8,167m）との間のカリガンダキ河畔、ジョム



ジョムソン空港からのニルギリ

ソンに降り立ったのだ。光線の関係かニルギリが神々しく思える程高く輝いている。正しくヒマラヤのど真ん中に降りた感じである。こんな楽な話はない。以前アンナプルナの内院迄行ったことがあるが、何日も歩いて拝めた風景なのだ。

さてジョムソンの周辺は、これまでヒマラヤトレッキングで訪れた村々に比べてすっきりしている。後で解った事だが、この街道は他に比べて裕福なのだ。先ず河畔、それも中腹迄農地が多い。それにチベットからインドに通じる交易



マルファ村の街道

ルート、塩の道として発達したと聞く。

パジェロまがいのジープがやってくる。ガイド入れて5人。それに荷物を載せて軽々走る。勿論道は悪い。しかし通過する村々が美しい。特に最初のマルファ村。道の両脇の壁が全て白く、家並みも揃い、イタリアか何処か地中海の白い村と変わらない。車を村の出口に回しておいて村内をゆっくり歩く。道

は左右に曲がれど、白壁は続く。山の斜面には白い塔が見える。これこそ絵になる

風景。うちの家内が三文絵描きだが、50年以上も付き合えば、絵になる風景も解ると言うものだ。それと田畑も広い。いろんな作物、果物が出来る様だ。

突如ガイドが「河口慧海記念館だ。」と言う。そういえば、案内に書いてあったが忙しくて忘れていた。少し立派なお家に看板が掛って居る。入ってみると1

階の狭い庭は、その家の夫婦のトウモロコシの皮むきで足の踏み場もない。記念館は2階らしく上がってみると、先ず暗いが、鍋、茶瓶等生活用具が並ぶ部屋が有り、続いて居間の様、ここで生活されたのだなあと思って、外側に回ると、これまた一層暗い部屋が有って、明らかに仏間の様でもあるが、信仰そのものが部屋全体に詰まっている様な、



河口慧海の修行部屋

思わず身の引き締まる思いがする。河口慧海が修行された部屋なのだ。

帰って調べた所によると、河口慧海は日本や中国の仏典に疑問を持ち、原典のチベット語訳を求めて、鎖国厳しいチベットに潜入すべく、ポカラからムクチナート経由の際、このマルファ村で、間道が通れる季節まで、3ヶ月程滞在されたと言う。そしてご存じのように潜入を果たされるが、その苦難の程は言うまでもない。要は3ヶ月滞在されただけの家の2階が、そのまま残され、未だにその思いの深さが伝わって来るとは、さすがとしか言いようがない。

そのマルファ村、そして次のツクチェ村を経て、ドウラギリ側の山の斜面を登る。正味は4~50分程と言うが、かなりハードなドライブ。そして目的のタサンブレッジに着く。これまたシックで品格が感じられるホテルである。気に入った。

夕刻、直ぐ上のナウリコットの村を訪ねる。山村を絵に描いたような、美しく、且つ子供たちがのびのび遊んでいるのが印象的。



タサンブレッジ全貌

との事。着込んで屋上へ。

確かに星空がきらめく。星座は余り知らないが、オリオン、北斗7星等々バッチリ。何しろヒマラヤの底、全く他の光がない。

これが夜空なのだと感心しているうちに、ドウラギリに朝日が照らしだす。



ドウラギリ (8,167m) の朝日

見事！！としか言い様が無い。8,000m 峰とそれに続く峰々が浮かび上がってくる。荘厳そのもの。それにホテルに泊まっているのは我々だけで静か。大空とヒマラヤを独占している気分。

今日はショコン湖を訪ねる日。ホテルは海拔 2,700m ぐ

らい。そこから2~300m下って、一旦カリガンダギ溪谷に下り、本流を少し下って右岸の谷を越え、又2~300m登り直す。ホテルの犬が2匹ぴったり付いて来る。昼飯にありつけるのだ。天気は良いし、周りは7~8,000m峰、のんびり歩く。カリガンダギ溪谷の川幅は、広い所で1kmぐらいいあるだろうか。その流れは網の目の様に別れて、見た目では歩いて渡れそう。

登りの道も良い。上部に廃村がある。そして湖。何の変哲もないダウラギリの東斜面の直径1~200m程の水たまりに見える。ガイドが「向かい側に行け。」と言う。そこで腰を下ろした時、歓声を上げた。湖面一杯にニルギリが写るの



ショコン湖に写るニルギリ

だ。

廻りの景色を楽しみながらランチを食べる。至福の時である。犬も至福。

帰りも同じ。ホテルに帰り。暖炉に火が入れられ、夕食は炬燵の上だった。このホテルはどうも日本人が設計し、日本人に人気と聞くが納得。

10月31日(金) 今日

はもう少し遠い湖の探索の予定であるが、みんな遠くを敬遠。「ホテル下のカリガ

ンダギ溪谷のコバン、トクチェ村を訪ねよう。」と言う事になる。上から見ても、斜面に広がる畑、山村、寺院風景が何とも言えない懐かしさを覚える。

又も下山。そして溪谷、人家、橋、寺院、畑、家畜、そこで働く人々、陽に当たる老人、遊ぶ子供たち。どれも絵になり写真になる風景だ。コバン村を抜け、次のトクチェ村へ。軽いトレッキング。疲れれば道端に休む。東を見ればニルギリ、西を見ればダウラギリ、その間に村々が納まっている。村人ものんびり、特に学校を覗くと子供達が元気に遊んでいる。それも我々を全く意識せず伸び伸び自然体。何となくお互いに親しみさえ覚える。気楽に我々と一緒に写真に納まってくれる子供が居る。昔は日本でも寒村、開拓村などに行くと、子供は警戒したものだ。

後でホテルに帰って、そこに置いてあるパンフレットを見て



村の子供達

解った。日本人ボランティア 30 人程が、毎年桃の花が咲く頃、この村、ナウリコット村等にやってきて、子供たちに、絵、工作、音楽を教えに来ているのである。今年で 7 回目になると言う。なんと感動する話だ。

それもここの村の女性出身者が、カトマンズの師範学校に行き、そこで活躍している女性を見、村では女の子は、家事、畑、家畜の世話で殆ど教育を受ける機会が無く、且つ親の勧めで婿と結婚をし、子供を沢山生む。教育を受けた男の方は出稼ぎに行き、無学な女性が子供を育てる。その事をカトマンズ在住の日本人に伝えたい。その日本人たちが日本に呼び掛け、どうもグラフィックデザイナー達が対応し、それが広がって行った様だ。これほどの国際貢献は無い。いずれその子供たちは都会に出て行く。世界に出て行く人も有るだろう。子供の頃の日本人の印象は一生忘れられないだろう。

その後、村々を散策、寺院を訪ね、村の民宿兼喫茶店を 2 軒も立ち寄り、お茶を飲み、だべり、帰りはジープをチャーターしてホテルに戻る。今夜は日本人団体 10 人ほどが来ていた。

11 月 1 日 (土) 今日はポカラに戻る日。早朝ジープの迎えでジョムソン空港に向かう。その割に飛行機が来ない。こちらは好天なのだが、ポカラが霧とか。10 時頃谷一杯に轟音を響かせて飛んでくる。午前中の好天時間に全てを運んでしまうらしく、忙しい。バタバタ乗り込んで飛ぶ。落ちなければ小さな飛行機は面白い。ポカラ到着。これまた彼のフィッシュテールホテルへ。ここは何度来ても素晴らしい。

午後は観光。特に山岳博物館を指名した。ガイドも「行ったことは無い。」と言う。

先ず広い。ゆったりしていて特に土曜日なのか、いつもなのか子供、大人達の見学者が多い。子供用の岩登りの壁や、遊戯用具に子供たちが大勢取り付い



ポカラ山岳博物館の子供達

ている。どうも遊園地としても利用されているようだ。

建物のスケールも大きい。勿論展示物も豊富。民族博物館的要素も備えている。

なんとって 8,000m 峰の展示に目が行く。私が高校山岳部時代、先ず「処女峰アンナプルナ」に感動している頃、エリザベス女王戴冠式直前にイギリス隊がエヴェレストに

登頂。その後次々と 8,000m 峰が落とされた事を思い出す。日本のマナスル登頂を含め、当時の用具が展示されているが、その貧弱さに驚く。

片やあまり登頂国競争を意識させない展示に感服し、一方エヴェレストのごみで造った大きなピッケルにはその展示意図がありありと理解。

ヒマラヤはネパール国民の誇りだろうけれど、この博物館はそれを一層象徴している様だ。

その後は、見物と土産物探し、ネパール料理に舌鼓を打つ。

11月2日(日) 今日カトマンズに戻る日。昼前の飛行機なので、午前中天氣が良ければサランコットの丘からヒマラヤを眺めようとの事だった。

10時頃ガイドから電話が有って、「今サランコットが晴れてヒマラヤが見える。直ぐ迎えに行く。」との事。そしてタクシーでサランコットの丘へ。何時も早朝は車で渋滞するとか。展望台に達するとやや雲が多いが確かにマチャプチャレを真ん中に、アンナプルナ各峰が両側に並ぶ。但し昨日までダウラギリ、ニルギリ、アンナプルナサウスを眼前に見てきた我々としては、一覽するだけで充分でありました。

昼過ぎカトマンズへ。ラデイソンホテルに荷を置き、ネパールが初めてと言う人が居たので、目玉寺とパターンを見物、以前訪ねた頃よりきれいになっている。

11月3日(月) カトマンズ発 2時頃発の飛行機が遅れたが、バンコックの待ち時間が短くなるだけ。そしてバンコックの深夜便、それぞれ関西組、東京組が別れて乗る。到着はそれぞれ翌早朝。もう少し段取りよく行くなら、ヒマラヤももっと近くなるのだが。